様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年 １０ 月 ２３ 日現在

機関番号：３４２０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｋ００５１１

研究課題名（和文）ファウスト文学に見る「神の死」の系譜

研究課題名（英文）Faust-Literature and Genealogy of the Death of God

研究代表者
高橋　義人（Takahashi, Yoshito）

平安女学院大学・国際観光学部・教授

研究者番号：７００５１８５２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の課題は、ニーチェのいう神の死をファウスト文学のなかに位置づけることにある。ニーチェ以前にファウスト文学を書いたゲーテ、ハイネは、神を殺したのは自分だと言明する。この二人の汎神論者は、緑なす自然のなかで生き生きとした神の息吹に触れた。新たに見いだされたのは生命力に満ちた神だった。だが、その神の発見とともに、キリスト教の「やせ細り蒼ざめた神」は死んだ。そしてニーチェ以降、トーマス・マン、ヴァレリー、ブルガーコフらが描くファウスト文学では、神はもはやどこにもいず、まるで悪魔が支配している荒涼たる精神風土だった。本研究は、ファウスト文学が西欧精神史を読み解く上で重要な鍵となることを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
従来ファウスト文学はドイツ文学に属すとのみ見られていたが、本研究はファウスト文学はヨーロッパ全体の文学であること、ファウスト文学の歴史は西欧近代の精神史であることを示す。19世紀のファウスト文学には西欧人のキリスト教的な神への反抗の足跡が刻まれている。その主人公たちは自我の拡大を喜びをもって経験する。だがそれは同時にキリスト教的な神を葬る営為でもある。そして20世紀、すでに神は死に絶え、大戦争が繰り返される世紀を迎える。創造的な精神が枯渇したこの荒涼たる時代において、主人公はもはや神とではなく全体主義という悪魔と戦うことを余儀なくされている。文学研究を通して見た特異な西欧精神史研究である。

研究成果の概要（英文）：The task of this study is to situate what Nietzsche called the death of God in Faustian literature. Goethe and Heine, who wrote Faustian literature before Nietzsche, declared that it was themselves who killed God. These two pantheists felt the breath of lively ‘new’ God in green nature. Their ‘new’ God had a strong vital force and was a source of life. But while they discovered this ‘new’ God, the ‘old’ God of Christianity who looked "emaciated and pale” died. After Nietzsche, Thomas Mann, Valery, Bulgakov, and others wrote their own Faustian literature in which God was no longer anywhere to be found. As a result, it was the devil, who reigned this desolate spiritual landscape. This study shows that Faustian literature is an important key to interpreting the Western spiritual history.

研究分野：ドイツ文学

キーワード：ファウスト　西欧精神史　キリスト教　汎神論　悪魔　ゲーテ　トーマス・マン　ブルガーコフ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

今日、ヨーロッパ諸国では人々の無神論化が進んでいる。ポーランドやアイルランドではカトリック信仰が強いが、英独仏の大半の人々は、カトリックにせよプロテスタントにせよ、もはやうっすらとしか神を信じていない。ニーチェはすでに 1882 年に「神は死んだ」と記した。その神の死は 21 世紀の今日、ますます進行しつつある。神の死は、現代社会を考察する上で避けて通ることのできない問題である。神の死の前には「神への反逆」がある。そして「神への反逆」を文学的主題にしたのが、宗教改革時に生れ、ゲーテ、ロマン派、ニーチェ、トーマス・マン、ブルガーコフ等で有名になったファウスト文学である。ならばファウスト文学の側から「神の死」を照射することはできないか。そう考えてこれまで 20 年以上のあいだファウスト文学の系譜について研究を重ね、G・ベーメらのドイツ人研究者とも協議を重ねてきた。これが背景である。

２．研究の目的

一連のファウスト文学に即して神の死について論じるには、各作品の時代に即し、神の死がどうして起きたのか、誰が神を殺したのか、誰が悪魔役か、神が死んだ世界で力を揮っているのは何か、問わなければならない。それを明らかにし、ファウスト文学の系譜をヨーロッパの精神史と接合させ、「神の死」の視点から現代を浮かび上がらせるのが、本研究の目的である。

３．研究の方法

神への反逆者は一般に「悪魔」と呼ばれる。民衆本『ファウスト』（1587 年）である。これはルター派の作者による作品で、ここで悪魔はカトリックの聖職者とほぼ同定されている。プロテスタントから見たらカトリックは悪魔、カトリックから見たらプロテスタントは悪魔だった。

ところが 18 世紀の啓蒙主義の時代になると、悪魔の存在はもはや信じられないようになる。だが逆に、悪魔との契約者ファウストというモティーフは、イギリスやドイツで盛んに取り上げられるようになった。つまりファウスト文学に出てくる悪魔はもはや正真正銘の悪魔ではなくて何らかの比喩である。悪魔が何の比喩であるかを捉えるのが、本研究のポイントである。

４．研究成果

『ファウスト』を書いたゲーテも、別に悪魔の存在を信じていたわけではない。悪魔との契約のモティーフを借りてキリスト教を批判し、新しい宗教を模索するのが、彼の狙いだった。彼には汎神論体験があり、その体験の下にゲーテは劇詩『プロメテウス』を書いた。この劇詩は、『ウアファウスト』とともに、若きゲーテの汎神論思想と反キリスト教思想を論じるときに欠かせない作品である。高橋はこれについて科研研究会で数回にわたって発表し、それを論文「ファウストとプロメテウスの神殺し――若きゲーテの危険な反逆」（近刊）、および「アンチ・キリストとしての若きゲーテ――神の殺害者は誰か」（近刊）としてまとめた。

キリスト教は通例、禁欲と現世的な生の抑圧を説くが、しかし真の宗教とは、それとは真逆の、生を鼓舞するもの、「内的情熱がほとばしり出たもの」ではないか。ゲーテと同様そう信じたのは、ハイネだった（担当：細見）。1842 年 1 月 7 日、ロッシーニの「スタバート・マーテル」がパリで初演された。概ね絶賛されたが、一部にはこれを宗教音楽なのに「世俗的で官能的すぎる」と批判する人たちがいた。そこでハイネはロッシーニを擁護し、「真にキリスト教らしい芸術とは、やせ細り蒼ざめた姿ではなく、内的情熱がほとばしり出たものであり、ロッシ

ーニの「スタバート・マーテル」のほうがメンデルスゾーンの「聖パウロ」よりもキリスト教的である」と述べた。キリスト教教会の祭壇の前にはイエス・キリストの「やせ細り蒼ざめた」、今まさに死なんとしている彫像が置かれている。だが真の神とは生を抑圧するものではなく、生を鼓舞するものであると信じたハイネは、ここでキリスト教を暗に批判している。

生の抑圧か鼓舞か。この問題に、本科研に従事している私たちも直面した。コロナ禍である。本当は京都と東京で交互に研究会を開くのを楽しみにしていたが、それも難しくなった。その代りに ZOOM 研究会を隔月に開いたが、やはり対面のときのように、参加者の顔が見えず、みなの反応が分からなかった。そういう状況下で想起されたのはゲーテの『ドイツ避難民の談話』(1795 年）だった。フランス革命のさなか、フランス軍の侵攻によって領地を追われたドイツ人たちは肩を寄せて一箇所に集まった。他に何もすることがないので、みなが交互に物語を話して過ごした。ゲーテにはそういう実体験があり、それをもとにして書かれたのがこの小説である。この小説のなかには次のような一節がある。

> 「金よりすばらしいものは何か」と王が尋ねた。「光です」と蛇は答えた。「光より楽しいものは何か」と王が尋ねた。「会話です」と蛇は答えた。

人生で最も大事なものは金でも光でもなく他者との会話である。この小説のなかには、フランス革命時の混乱のなかでゲーテが噛みしめた辛い思いが凝縮している。他人としばらく話ができなかっただけに、戦火を逃れてやってきた避難民と出会い談話したとき、彼は心が癒された。そしてそれはコロナ禍で苦しめられていた私たちの思いでもあった。私たちもまた多かれ少なかれ引きこもりの生活を余儀なくされていたのだから。

ゲーテが体験したフランス革命中の苦しさとコロナ禍中の私たちの苦しみを引き比べた研究発表「ファウストと大地からの疎外――ゲーテが予見していたコロナ・パンデミック」（担当：高橋）は、後に学会誌「モルフォロギア」に掲載された。

フランス革命の時代にゲーテが目の当たりにしたのは産業革命と資本主義だった。『ファウスト』第二部では産業革命も資本主義もすでに「悪魔的」なものとして描かれている。だが、その後、産業革命や資本主義は加速度的に進行し、そこに訪れたのは、ゲーテが予期していなかった恐ろしい「神の死」だった。「神は死んだ」と宣言したのはニーチェだった（担当：細見)。彼はゲーテやハイネと同様、生を高めるものとしての神を称揚し、キリスト教的な神を批判した。ニーチェが生きた 20 世紀後半はキリスト教批判が盛んになった時代で、多くの人々が教会に通うのをやめ、キリスト教に背を向けるようになった。だが彼らはキリスト教的な神の代りに、イスラム教や仏教に向ったわけではなかった。こうして宗教は衰微し、神は死んだ。

神の死の次に訪れたのはヒューマニズムの死だった。二度の世界大戦はヒューマニズムに致命傷を与えた。その時代に二つのファウスト文学が書かれた。ヴァレリーの『わがファウスト』（担当：宮田）とトーマス・マンの『ファウストゥス博士』（担当：高橋）である。ヴァレリーは、産業革命が進み、各国が先端技術の開発と資本主義の成長に鎬を削る結果、人間の精神そのものが危機に陥ることを鋭く洞察した。『わがファウスト』にはルストという女性悪魔が登場する。ドイツ語の Lust（ルスト、欲望）である。精神の危機を招くのは資本主義的な欲望である。ヴァレリーの洞察は『ファウスト』第二部におけるゲーテの危惧を引き継いでいる。ヴァレリーのいう「精神の危機」とは「ヒューマニズムの危機」である。彼は、「神の死」の後に来るものが「人間の死」であることをすでに鋭く予見していた。

第二次大戦を惹き起こしたのはナチス・ドイツである。そのナチスに反対したトーマス・マンは亡命を余儀なくされた。彼が亡命先のアメリカで書いたのが『ファウストゥス博士』である。マンはすでに第一次大戦前後に書かれた小説『魔の山』（1924 年）でヒューマニズムとは

何か、ドイツ的とは何かを問うた。さらに彼は『ヨーゼフとその兄弟たち』（1943 年）ではいかにして神は誕生したか、ヨーロッパとは何かという大問題を取り上げた。ナチスが政権を奪取した 1933 年に書き始められ、1943 年に完結した大作である。『ヨーゼフ』を書き終えたマンはすぐに次の『ファウストゥス博士』の執筆に取りかかり、第二次大戦終了後にこれを刊行した。ここで問われているのは、ヴァレリーが危惧していたヒューマニズムの死、人間の死、ヨーロッパの死、世界の終焉である（担当：高橋）。

トーマス・マンはナチスの前身をルターのなかに探り、ルター的なものはドイツ的で悪魔的であると断じた。「『ファウストゥス博士』の成立」のなかには「この作品の目立たぬ主人公として、姿は持たないながらも悪魔がひそんでいる」とあるが、この小説のなかでは主人公のアードリアーン・レーヴァーキューンの父親のなかに、「マルティーン・ルターを戯画化した人物であるクンプ教授」のなかに、そしてヒトラーのなかに悪魔が次から次に立ち代わり現れる。では、マンが言うように、ナチス的なものをすべて悪魔に結びつけていいものか、それは中世的なデモノロジーへの立ち戻りではないか、など本研究会では論争が白熱した。

戦後、トーマス・マンがアメリカからドイツに帰国したとき、彼は期待していたような歓迎を受けなかった。亡命先のアメリカでマンは自由に書き、ドイツ的なものの多くに「悪魔的」という烙印を捺したが、ドイツ国内にとどまって反ナチ運動を続けてきた人々は、ナチスに大声で反対することも賛成することもできず、苦渋の生活を強いられた。事態はマンが言うほど簡単なものではなかったと言い、マンを批判したのである。

ナチス時代のような状況がソ連では戦後も続いていた。ヒトラーと並ぶもう一人の独裁者スターリンがいたからである。スターリニズム下のソ連で独裁者といかに戦うか。これが、1953 年 3 月、スターリンが死ぬまでの反スターリン派の共通の問題意識だった。その状況下で、ブルガーコフは『巨匠とマルガリータ』というファウスト文学を書き、反スターリン派の人々の複雑な心の襞を苦渋に満ちた筆致で詳らかにした（担当：増本）。

巨匠とはファウスト、マルガリータとはグレートヒェンのことである。作者ブルガーコフの分身である作家の「巨匠」は、ゲーテのファウストのように、悪魔と堂々と対峙はしない。彼はたえず怯え、何をするにも臆病である。彼は悪魔と果敢に立ち向かうことはできない。そんなことをしたら、簡単に粛清されてしまうからである。悪魔なぞ信じていなかったゲーテにとってメフィストは非現実の絵空事だったが、トーマス・マンやブルガーコフにとってヒトラーやスターリンという悪魔は自分のすぐそばにある現実だった。マンはその悪魔から逃れるべく亡命したが、ブルガーコフは亡命しなかった。そのため、スターリンに反対しながらも、それをはっきりと口に出して言うことができない。自分は臆病だ、卑怯者だという意識が、巨匠（＝ブルガーコフ）の心を苛んでいる。

ゲーテの『ファウスト』以降、数多く書かれたファウスト文学の主人公は概ね「英雄」である。ところがブルガーコフの『巨匠とマルガリータ』に出てくるのは、英雄らしからぬ臆病なファウストである。巨匠が臆病であるばかりではない。この小説にはもう一人、臆病な人物が登場する。それは巨匠が書いている古代ローマ帝国が舞台の小説、イエス・キリストに関する物語の主人公ピラトゥスである。ヨシュア（イエス）は反ローマ帝国の罪で告訴されている。ピラトゥスはそれを裁かなければならない。ヨシュアは少々気の触れた男かもしれないが、彼に罪があるとは思われない。しかもピラトゥス自身がローマ帝国皇帝に反感を抱き、反逆したいとすら思っている。だが、それはできない。彼は皇帝のことが怖い。彼はヨシュアを救いたいが、そうすることができない。自分は臆病だ、このまま死んでも自分は救われない。そう思うと、彼は巨匠と同じく鬱状態に陥らざるをえない。

主人公は三人いる。作家の巨匠とイエスと魔術師ヴォランドである。舞台も、エルサレム、モスクワ、ヴォランドの魔術の世界の三つにわたる。神であるイエスは光の世界に住み、「悪の魂で影の君主であるおまえ」と呼ばれるヴォランド（悪魔）は闇の世界にいる。そして作家である巨匠がいるのは、光でも闇でもない「くもり」の世界である。それは栄光と悲惨の中間の領域である。そしてエルサレムが遠い過去であるとすれば、モスクワは現代の現実である。

作者ブルガーコフにとってスターリンは悪魔である。しかしこの小説に登場する悪魔はむしろ反ソのパルチザン、モスクワ市内を騒擾状態に陥れるアナーキストである。だとすれば、この悪魔こそ神ではないか。なぜ悪魔が神なのか。そこにこそ作者がこの小説のなかにこめた仕掛けがある。この小説のなかにはMの頭文字を持つ人物が四人登場する。巨匠（Master）、マルガリータ、マタイ、メフィストである。Mを逆転させるとWになる。Wの頭文字をもつ人物も一人登場する。悪魔のヴォランド(Wolland)である。ヴォランドは悪魔であるから、メフィスト(Mephisto)である。W と M は逆転するとイコールになる。ブルガーコフはフローレンスキーの『幾何学における虚数性』(1922) を読み、現実世界から虚数世界へ移行するときに身体の「裏表が逆転する」ことを学んだ。WはMへと上下を逆にするのではなく、Mを裏返しにして転換する。すると臆病だった巨匠（M）は、なんとヴォランド（W）という悪魔に転換する。巨匠は、自分を裏返しにすることによってヴォランド的な魔術的な自由を手に入れることができるようになる。現実的な面においては自由を得られなかったブルガーコフにとって、これは自由を得るために残された唯一の手段だった。それは、救いのないこの小説における唯一の救いだったのである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計15件（うち査読付論文　15件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 高橋義人	４．巻 43
２．論文標題 ファウストと大地からの疎外――ゲーテはコロナ・パンデミックを予見していたか	５．発行年 2021年
３．雑誌名 モルフォロギア	６．最初と最後の頁 2-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 高橋義人	４．巻 22
２．論文標題 失われた江戸を求めて――永井荷風の反近代の足跡	５．発行年 2022年
３．雑誌名 平安女学院大学研究年報	６．最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 細見和之	４．巻 53
２．論文標題 ベンヤミンにとってのボードレール	５．発行年 2021年
３．雑誌名 びーぐる	６．最初と最後の頁 46-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 細見和之	４．巻 54
２．論文標題 映画『ショアー』のなかのイディッシュ・リート	５．発行年 2022年
３．雑誌名 びーぐる	６．最初と最後の頁 24-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 細見和之	4．巻 3518
2．論文標題 菅野賢治『「命のヴィザ」言説の虚構』評	5．発行年 2021年
3．雑誌名 図書新聞	6．最初と最後の頁 8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 細見和之	4．巻 3405
2．論文標題 ミハエル・グルエンバウム／トッド・ハサク＝ロウィ『太陽はきっとどこかで輝いているはず』評	5．発行年 2021年
3．雑誌名 読書人	6．最初と最後の頁 5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 細見和之	4．巻 26
2．論文標題 大橋毅彦『D・L・ブロッホをめぐる旅』評	5．発行年 2021年
3．雑誌名 ナマール	6．最初と最後の頁 98-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 増本浩子	4．巻 16
2．論文標題 誘惑に負けたのは誰か―ブルガーコフの『巨匠とマルガリータ』	5．発行年 2022年
3．雑誌名 DA	6．最初と最後の頁 48-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 増本浩子	4．巻 15
2．論文標題 デュレンマット作品におけるファウスト的人物像―喜劇『加担者』を 中心に	5．発行年 2021年
3．雑誌名 DA	6．最初と最後の頁 29-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 高橋義人	4．巻 別冊
2．論文標題 志村ふくみとゲーテの「繊細なる経験」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 河出書房『文藝別冊』	6．最初と最後の頁 87-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 高橋義人	4．巻 42
2．論文標題 ゲーテとグリム――ヨーロッパの古層を探る「ヴァルプルギスの夜」連作	5．発行年 2020年
3．雑誌名 モルフォロギア	6．最初と最後の頁 2-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 高橋義人	4．巻 21-1
2．論文標題 京都はいかにして今の京都になったか――上知令と廃仏毀釈後の明治初期のまちづくり	5．発行年 2020年
3．雑誌名 平安女学院大学研究年報	6．最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 細見和之	4．巻 47
2．論文標題 災厄に抗する抒情	5．発行年 2020年
3．雑誌名 びーぐる	6．最初と最後の頁 18-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 細見和之	4．巻 25
2．論文標題 「シオニズム論争」をめぐって	5．発行年 2020年
3．雑誌名 ナマール	6．最初と最後の頁 50-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 細見和之	4．巻 50
2．論文標題 災厄のただなかで書かれ得る、存在しなかったかもしれないもの	5．発行年 2021年
3．雑誌名 びーぐる	6．最初と最後の頁 25-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計19件（うち招待講演　10件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 高橋義人
2．発表標題 ファウストと大地からの疎外――産業革命から新型コロナへ
3．学会等名 ゲーテ自然科学の集い（招待講演）
4．発表年 2021年

１．発表者名 高橋義人
２．発表標題 ゲーテとコロナ――産業革命から大地疎外へ
３．学会等名 平安女学院大学観光研究会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 高橋義人
２．発表標題 経済か文化か――敬愛する故長尾真先生の発言集をもとに
３．学会等名 日本文化創出研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 高橋義人
２．発表標題 京都 水と緑の都
３．学会等名 教員免許更新講義（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 高橋義人
２．発表標題 文化首都としての京都を考える
３．学会等名 日本文化創出研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 高橋義人
２．発表標題 ゲーテ的調和の時代はつとに去り――トーマス・マン『ファウストゥス博士』
３．学会等名 科研オンライン研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 高橋義人
２．発表標題 現代における文化と文明
３．学会等名 日本文化創出研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 高橋義人
２．発表標題 危機に瀕した日本文化とその行く末
３．学会等名 日本文化創出研究会
４．発表年 2022年

１．発表者名 高橋義人
２．発表標題 新京極、円山公園、花見小路――今日の京都はいかにつくられたか
３．学会等名 ＫＧＦ36（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 宮田眞治
２．発表標題 進歩・知識欲・人間　について ―リヒテンベルクの考えていたこと
３．学会等名 科研オンライン研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 宮田眞治
２．発表標題 WielandともうひとつのAntike（1）
３．学会等名 科研オンライン研究会
４．発表年 2022年

１．発表者名 宮田眞治
２．発表標題 WielandともうひとつのAntike（2）
３．学会等名 科研オンライン研究会
４．発表年 2022年

１．発表者名 高橋義人
２．発表標題 京都はいかにして今の京都になったか――上知令と廃仏毀釈後の京都まちづくり
３．学会等名 京都伝統文化の森推進協議会公開セミナー（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 高橋義人
２．発表標題 明治初期京都のまちづくり
３．学会等名 平安女学院大学観光研究会
４．発表年 2020年

１．発表者名 高橋義人
２．発表標題 三島由紀夫　空っぽになってしまった日本を衝く
３．学会等名 哲学カフェ　ゲーテの会（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 高橋義人
２．発表標題 巨石信仰と日本庭園
３．学会等名 大学コンソーシアム京都（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 高橋義人
２．発表標題 コロナと<人間の終わり>
３．学会等名 日本フンボルト会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 高橋義人
２．発表標題 ファウストと大地からの疎外――産業革命から新型コロナへ
３．学会等名 ゲーテ自然科学の集い（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 宮田眞治
２．発表標題 "Durch das planlose Umherstreifen durch die planlosen Streifzuege der Phantasie wird nicht selten das Wild aufgejagt, ..." Einige Bemerkungen zum Phantastischen bei Lichtenberg
３．学会等名 日本独文学会 Online-Kulturseminar: Die Phantastische Literatur（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計12件

１．著者名 河本英夫・高橋義人他	４．発行年 2021年
２．出版社 学芸みらい社	５．総ページ数 280
３．書名 現象学　未来からの光芒――新田義弘教授追悼論文集	

１．著者名 西本清一・高橋義人他	４．発行年 2022年
２．出版社 国際高等研究所	５．総ページ数 64
３．書名 「日本文化創出を考える」研究会2021年度報告書	

１．著者名 細見 和之、松原 薫、川西 なを恵	４．発行年 2021年
２．出版社 岩波書店	５．総ページ数 88
３．書名 消えたヤマと在日コリアン	

１．著者名 細見 和之・山田 兼士	４．発行年 2021年
２．出版社 澪標	５．総ページ数 288
３．書名 対論Ⅲ(2016~2020)	

１．著者名 鎌田東二・高橋義人他	４．発行年 2020年
２．出版社 ナカニシヤ出版	５．総ページ数 304
３．書名 京都の森と文化	

１．著者名 西本清一・高橋義人	４．発行年 2020年
２．出版社 国際高等研究所	５．総ページ数 32
３．書名 「日本文化創出を考える」研究会2019年度報告書	

１．著者名 佐伯啓思編著・高橋義人監修	４．発行年 2020年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 218
３．書名 高校生のための 人物に学ぶ日本の思想史	

１．著者名 猪木武徳編著・高橋義人監修	４．発行年 2020年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 191
３．書名 高校生のための 人物に学ぶ日本の政治思想史	

１．著者名 池内了編著・高橋義人監修	４．発行年 2020年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 224
３．書名 高校生のための 人物に学ぶ日本の科学史	

１．著者名 西本清一・高橋義人他	４．発行年 2021年
２．出版社 国際高等研究所	５．総ページ数 48
３．書名 「日本文化創出を考える」研究会2020年度報告書	

1．著者名 河本英夫・高橋義人他	4．発行年 2021年
2．出版社 学芸みらい社	5．総ページ数 280
3．書名 現象学　未来からの光芒――新田義弘教授追悼論文集	

1．著者名 日本アーレント研究会、細見和之他	4．発行年 2020年
2．出版社 法政大学出版局	5．総ページ数 430
3．書名 編『アーレント読本』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	増本　浩子 (Masumoto Hiroko) (10199713)	神戸大学・人文学研究科・教授 (14501)	
研究分担者	宮田　眞治 (Miyata shinji) (70229863)	東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・教授 (12601)	
研究分担者	細見　和之 (Hosomi Kazuyuki) (90238759)	京都大学・人間・環境学研究科・教授 (14301)	

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関